

アスベスト公害の原点 クボタショック

クボタショックから二年を迎えて

中皮腫・アスベスト疾患・患者と家族の会

古川 和子

「Xデー」という言葉がある。私が初めてこの言葉を耳にしたのは、三井物産の池で誕生したカルガモ親子が道路を横切って皇居のお堀へ「お引越し」する日は何時なのか……、という記事だった。以来、私にとっての「Xデー」は「次につながる日」となった。まさに、クボタとの交渉の中でも幾つかの「Xデー」を迎えてきた。あれから二年近く経ち、今ここで数々の「Xデー」を振り返ってみよう。

「クボタショックの始まり」に向けて

日本中を震撼させた「クボタショック」からやがて二年。六月二九日の毎日新聞夕刊で突然の

スクープだった。しかし、その五ヶ月前の一月には、朝日放送系のニュース番組で「住民が中皮腫発症」と紹介されていた。「クボタ」の名前こそ出してはいないが、上空からの写真を見れば地域の人にとっては一目瞭然だった。その時のニュースを見て「もしや……」と疑問を抱いていた人もいたことが後にわかった。

先日、尼崎市で起こったJR列車事故から二年の報道を見ていて、私も別の感動を込めて二年前を思い起こしていた。列車事故があった四月二五日の翌二六日には、クボタの部長たちと患者三名が初めて会うことになっていたのだ。面会場所は列車事故の起こった至近距離、JR尼崎駅近くのある公民館の一室を借りていた。その前年一〇月から一人目の患者である土井雅子さんと出会い、彼女の発病した原因を調査していくうちに二人目の被害者、故前田恵子さんと知り合った。そして、前田恵子さんの口からは、当時のクボタ旧神崎工場の様子について驚くような言葉がたくさん出てきた。やがてもう一人の男性患者とも出会い、三人は勇気を持って「当時工場の中で何があったのか、クボタに聞いてみよう」と決まった。三月のある日だった。その決心を受けて尼崎労働者安全衛生センターの事務局長・飯田浩さんが、当時同じく市会議員をしていた米田守之さんという元クボタOBの方に相談を持ちかけた。驚いた米田議員は、早速クボタに話を持ち込んだ。「まさか」というのが当初の彼らの反応だった、と聞く。そのような経過を踏まえて、四月二六日午後から私たちはクボタと会うことが決まった。

会ってどうなるのか？ 会ってみて何がわかるのか？ あのような大企業が正直に認めるだろうか。面会することが決まった後は、さらなる緊張感が湧いてきた。

緊張した中で迎えた前日の突然の「列車事故」のニュース。食い入るようにテレビ画面を見ている中である種の不安がよぎった。「明日に予定されている面会は大丈夫だろうか？」考えてみれば、あのように大きな列車事故の中に、当事者を含めたその家族・知人が含まれていないとも限らない。

不安な想いで迎えた翌二六日。予定通り患者三名とその妻、尼崎安全センターの飯田さん、関西安全センターの片岡さん、そしてクボタからは担当部長三名と橋渡しをしてくれた米田議員、そして私のメンバー——一名が揃った。

「やったー」と私は心の中で拍手した。話し合いがどうなるのかはわからないが、綺麗にスタートが切れた……そのことに感動したのだ。そして生来私の楽天的な性格は「この話は『GOサイン』が出たのだ」と勝手に解釈していた。

話し合いの前に、クボタから資料が配られた。驚くほど詳細な資料に眼を見張った。A3の用紙に事細かに、アスベストを使用していた時期と使用量、そしてその作業工程など。用紙の右上には「マル秘」のマークが押印されていた。一枚一枚を丁寧に説明する担当部長。その時に知った工場内の被害者の数には唖然として、話し合いの後に帰路についた私は、その数字ばかりが頭に浮かんできて、少々気分が悪くなったものだ。というのは、私の認識の中での腹膜中皮腫患者は、胸膜中皮腫患者に比べてかなり少ないと思っていた。それが、クボタの資料の中には驚くほどの数で発症していた。

「腹膜中皮腫は青石綿により発症することが多い」とかつて聞いたことがあったが、まさにその

通りなのか。私たちに考えられない状況で被害が発生していた……。このことに衝撃を受けるとともに「工場の中でこれほどまでに被害が発生していたのに、工場の外にも石綿が飛散していないと思っていたのか」という質問が繰り返された。この質問に対しては「工場の外にまで被害が及んでいるとは当時はわからなかった」との回答を繰り返すのみだ。

三人の患者は口々に、発病以来の苦しかった状況を語り始めた。今もなお、抗がん剤治療を受けながら「死」に直面して家族とともに闘っていることを訴えた。男性患者の奥様からは夫の発病以来の不安と苦しみが涙ながらに語られた。

「これは公害です」とそれぞれが訴えた。

「工場の塀一つ隔てたこちら側までアスベストが飛んでこないということが証明できますか」

「工場から、白い煙が舞い上がっていて火事だと思って駆けつけたら粉じんだった」(これは、コンクリートのミキサーが故障してセメントが舞い上がっていた。当時、近所の通報で消防車も出動したという返事)

「何時も工場の塀の外の道は白くなっていた」

発病以来、痛みと不安に苦しんできた患者さんたちは堰を切ったように語りだした。しかし、その言葉の中に「補償」という文字は一度も無かった。発病した原因を知りたい。クボタの工場の中でいったい何が起こっていたのか、そしてそれが自分たちの病氣と因果関係があるのか……彼らの誰もがその答えを求めているのだ。

二時間余りの話し合いは終わった。寂然としないままに時間が来たのだ。最後に私は米田議員

のもとに駆け寄り言った。「よろしくお願いします」と。何故このような言葉が出たのかわからないが、三人の患者さんをよろしく願います、という想いを込めて私は頭を下げていた。それは米田議員も後に「あの時のあなたの言葉が忘れられなくてね」と語っていた。

クボタの部長たちが引きあげた後に、私たちはまだ部屋に残って今後の対策を練った。間違はなく踏み出した第一歩。日本で初めての「アスベスト公害」をどのようにして会社側に認めさせるか……いや、それよりも絶対にクボタが原因だと言える確証をもっと模索しなければ。当日配布された資料により「間違いない」という確信はあったものの、今後はどのように進めていくのかなど、真剣に議論した。

当時、クボタ内部では「まだ原因もわからないので」会わない方がよい」という意見もあったようだ。しかし、そのような中で米田議員の「堂々と会うべき」という強い意志が通った。この米田議員は大変正義感の強い方であると聞いたことがある。

それからしばらくして、クボタ側から「見舞金」の話が出た。「見舞金二〇〇万円」という提示に誰もが戸惑い、一様にクボタの真意が理解できなかった。「工場の近隣住民の方が中皮腫を発症されて苦しんでおられることに対して、永年当地で操業してきた当社として何かできることは無いかと考えて、お見舞をさせていただくことにしました」というものだ。このお金を受け取ったら「今後は一切何も言わない」という条件付きなのか懸念すると、「お見舞金以上でも以下でもない」との答え。即座に私は「受け取って下さい」と三人に勧めた。何のためらいも要らない。クボタが近隣住民の中皮腫発症を認めて二〇〇万円支払うのだから。今までは何も無かった

のに「因果関係は不明だが近隣で中皮腫発症」という厳然とした事実が出来たのだ。

「今までの苦しんだことへの償いにはならないが、今後自分たちの被害状況を訴えていくための『心の肥し』として受け取ってほしい」と私は提案した。三人の意見もまとまった。そして、その時にクボタが提示した「見舞金・弔慰金規定」なるものがあり、そこにはクボタの指定する医療機関名が書かれていた。三人の見舞金が支払われた後に、飯田さんと私でその用紙を持って尼崎市内の病院中を回る計画をしていた。

「皆さん、中皮腫になった方はクボタから二〇〇万円支払われますよ！」と宣伝して被害状況の把握に努める予定だった。そのような思惑を含みつつ、見舞金の受け渡し準備は進み、「Xデー」は近づいてきた。

間に合わなかったAさん

実は、三名の患者さんの他にも既に死亡されている被害者がいたのだ。ある時、関西労働者安全センターに労災申請の相談に来られたAさんという四〇歳代後半の男性だ。彼は大学卒業後、大手のチェーンメーカーで設計の仕事をしていたが、中皮腫発症で休職中だった。まだ学童期の子供を抱えていて、将来への不安を強く感じていた。

治療中の兵庫医大で同じく治療中の患者さんから紹介されたのだが、Aさんのアスベスト曝露が職場の中から浮かんでこなかった。Aさんと知り合ったのは、私が土井雅子さんと出会った頃

だったと思う。Aさんは男性であり、それまでの私たちの認識では「職業曝露」しか考えられなかった。しかし、かなり詳細に職歴を調べても曝露歴は浮かんでこなかった。労災申請は暗礁に乗り上げていた。暗中模索の中で、ある「キーワード」が浮上してきた。

「小田南中学校」だ。どこかで聞いたことがある……「あ、そうだと土井雅子さんも小田南中学校に一年間通学していた」と気付いた私はAさんの居住歴を調べた。なんと、尼崎で生まれて小学校・中学校までクボタから近い距離にいたのだ。背筋がゾクッとしてきた。興奮してAさんに連絡を取り、再度事務所に来てもらったのは翌年の一月一九日。私の話に驚いた彼は「幼少期の頃のことを母に聞きます」と言ったきり連絡が取れなくなった。病状が急変したのでは、と心配するが一向に連絡が取れない。ある時、兵庫医大に行くと病室に彼の名前があった。面会しようとして病室を覗くと、Aさんのベッドは医師も駆けつけて緊迫した雰囲気だ。とても声をかけられなくて退散。後になって、この日の夜、Aさんが逝去されたことを知った。この時の無念さが私たちを駆り立てて「早くクボタへ申し入れをしなければ」と決心させたのだと思う。

最初の「Xデー」当日

あるご遺族のお家に伺った帰りの車の中。「毎日新聞が記事にしています！」と朝日放送のディレクターから突然の電話。明日見舞金の支払いが行われるという事実を、早くから朝日放送はつかんでいた。しかし、その前日に毎日新聞が夕刊でスクープしたのだ。

そして、朝日放送は午後三時のニュースで「周辺住民に見舞金」のテロップを流した。

日本中が騒然となった「クボタショック」の始まりだった。クボタの部長が記者会見をしているニュースを見て思った。「何故今頃？」と。

実は、五月二八日に朝日放送がドキュメンタリー『終わりになき葬列』（副題 発症から30年、いま広がるアスベスト被害）を放送していたのだ。そして、その時にはクボタの伊藤部長が朝日放送のインタビューに答えていた。残念ながらテレビでは会社の実名が出なくて「大手機械メーカー」とだけになっていた。何故、その時に企業名を出さなかったのかと担当のプロデューサーに尋ねたら「古川さん、人は長い人生の中でいろんな関わりを持って生きています。アスベスト曝露がクボタだと特定することは難しい。そのような確証の無い状態での実名報道は出来ません」との返事だった。

前日からの取材合戦の加熱もあり、見舞金支払いが行われる予定だった場所は二転三転した。「何時でも連絡が取れるように携帯を離さないで」と飯田さんからの指示。場所設定は難航した結果、ある会館を「安全懇話会」という名称で借りた。親しくしてきたマスコミ関係者から「居場所確認」のための連絡が続々と携帯の留守電に入っていることも無視してその会館へ向かった。部屋には既に、患者さん三名、クボタの部長たちと米田議員、飯田さんが揃っていた。緊張した中で行われた見舞金の支払い。意外と簡素な領収書。懸念されていた「一筆書く」こともなく本当にお見舞金の支払いが行われた。

終了後、米田議員から「あの時の古川さんに言われた言葉がずっと心に残っていた」と聞い

た。「え？ 何と言いましたか」「よろしく願います、と言われました」とにこやかに答えられた。米田議員は、最初に会った時とは別人のごとくに顔が穏やかになっていた。

その後は、皆様ご存知のように患者さん三人揃って記者会見が行われ「これは、公害です」と日本で初めてアスベスト公害が発表された。

そしてそれ以後、私たちは幾つかの「Xデー」を迎えることとなった。

鳴り止まない電話

二九日の毎日新聞夕刊から始まって、関西労働者安全センターの電話は頻繁に鳴っていた。翌三〇日には朝九時に事務所に行く、既に非常事態だった。三回線ある電話を三人の事務局長で対応した。しかし誰かの携帯電話が鳴ってそちらに対応すると、対応することが出来ない一本の固定電話のベルは悲鳴に近い音で鳴り響いている。

電話がかかるたびに、驚くような内容ばかりだった。「夫が中皮腫で治療しています」「父が中皮腫で亡くなりました」……相談を寄せてきた被害者はあつという間に二桁になった。そして関西安全センターの電話と同じように、尼崎の飯田さんの携帯電話にも想像を絶する数で相談があった。当時の尼崎安全センターは「専従職員」がいなくて、他に仕事を持っている飯田さんが兼任していた。だから、電話の連絡先は飯田さんの携帯番号が公表されていたのだ。

同じように、東京の「中皮腫・じん肺・アスベストセンター」にも問い合わせの電話が殺到し

た。当然、所長の名取医師、事務局長の永倉さんは殺人的なスケジュールを受け入れることとなった。我々ではなくて、尼崎市役所・保健所も降ってわいたようなアスベスト騒動に戦場となったと聞いた。

そしてこの瞬間から、未曾有のアスベスト公害が白日の下に晒されることになり、飯田さんと予定していた「被害者発掘のために尼崎市内の病院回り」は必要が無くなった。

疫学調査

連日の電話対応の中で、私たちは疫学調査を奈良県立医大の車谷先生たちをお願いすることになった。遡ること半年前の一月五日の夜、尼崎において車谷先生と大阪府立公衆衛生研究所の熊谷課長を招いて、私たちが調べている被害情報をもとに今後の疫学調査について相談していた。その当時は被害者がまだ数名だったので、今後の様子を見ながら……ということになった。

しかし数十万人にひとりの発症率だと言われていた中皮腫患者が、二九日の報道以来、限られた地域で数十人も発生していることがわかったので事態は急変した。

車谷先生たちが調査を開始したのはクボタショックから一ヶ月後のことだった。八月のお盆休みも返上して連日の調査が続いた。私も可能な限り調査に同行した。

調査の終了が夜の九時近くなることもあった。

「古川さん、どのような生活をしているのですか？」とある時、車谷先生に尋ねられ「こんな生

活ですよ」と私は笑って答えた。連日、朝から夜まで走り回っていた私の生活への疑問だったのだろう。しかし、その頃先生も昼間の大学の講義が終わると大阪まで出向いてきて調査をしていたのだ。後にこの調査はクボタに対してのみならず、社会的に大きな意義あるものとなった。

一時は「本当にクボタのアスベストが原因なのだろうか？　これほど多くの患者が発生するなんて信じられない。原因はウィルスか何かではないのだろうか」と調査に関わった私たち自身も不安になったものだ。

見舞金・弔意金の支払い

最初の三人に支払われた見舞金の制度は、しばらくして新たな被害者の方たちに対して再開された。その時は八家族位だったと記憶している。クボタの部長たちから、工場のアスベスト使用状況等が説明されて、その後、個々のご家族の方たちの想いが語られた。

一〇数年前に若くして夫を失い、幼子を抱えて苦労された方。妻を失ったが、その数年前に妻の弟も中皮腫で他界していたという男性。息子の苦しみの原因がわかったけれども息子は帰ってこない、と嘆く老婆。ある会館を借りて支払いを行っていたが、その会議室全体が涙と怒りに包まれた。

以後、週に一、二回のペースで数家族単位の支払いが行われてきた。毎回、クボタの部長たちは「皆さん方のお話を個々にお伺いして、その悲惨な状況や苦しみ、お怒りやご意見を全て筆記

し、その日のうちに社長まで報告を上げています」と言った。そしてそれは現在でも同じだ。